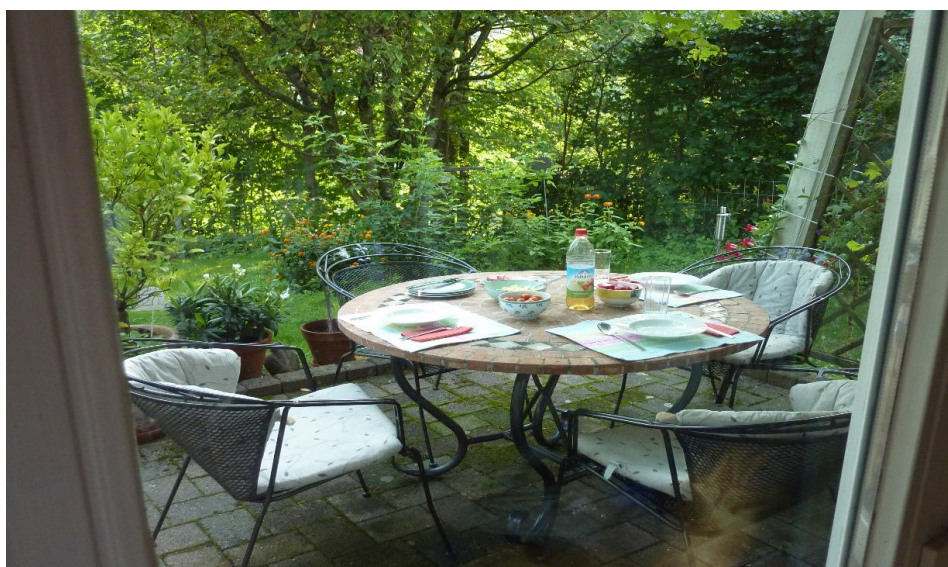


ドイツの家庭とメンケファミリー

片山 夢源

ソーセージにビール、サッカー、車。私がヴォ市へ行く前にドイツについて知っていることといえばそんなものでした。しかし、今回の訪問ではドイツ（というよりはバイエルン）の特徴から生活まで、多くの日本とは違う世界を知ることができました。

ドイツではヴォ市の方々が準備してくださったスケジュールの元、ノイシュヴァンシュタイン城やゲーテ山、パン作りに消防車での市内巡回など、多くの素晴らしい体験をすることができました。（思った以上に忙しくびっくりしました）私が最も印象に残ったことはメンケファミリーと過ごした時間です。ドイツが日本とは違う文化ということは分かっていたましたが、テラスでのんびりと会話しながら過ごす夕食は初めての体験で、それはドイツで体験した全ての経験の中で、最も驚かされるものでした。



また、お父さんを中心にメンケファミリーはアクティブで多くのイベントを企画してくれました。なかでも、他の訪問団のメンバーを呼んでのバーベキューは、非常に楽しいひと時でした。食べ物がおいしいのもさることながら、バーカウナーのある地下室や家の裏手の川でボートを漕いでみたり（初ボートはびっくりするほど難しかった）と日本では考えられないような環境で、訪問団や他のホス

トファミリーの青少年と親睦を深めることができました。

少しホストファミリーの話をする、メンケ家のお父さんは送られてきた写真（写真はまるで政治家の重鎮みたい）に似ず、おしゃべりで楽しい人でした。また、趣味の自転車の話でも盛り上がり、多くの楽しい話をすることができました。お母さんは物静かな方でしたが、料理が上手で、私が困ることのないようにと常に気にかけてくれました。大学生の息子のパトリック君は大学の試験の関係で数日しか会えませんでした、非常に闊達で好青年を絵に描いたような男の子でした。彼は海外への留学経験が豊富で、それらの話や大学の専攻の話（ミクロ経済や税金と経済の関係、電気自動車の話）など、ヴォ市の青少年が少ない中、大学生同士多くの話題で盛り上がる事が出来ました。



ドイツという国を再び訪れることは可能かもしれませんが、このようにドイツの家庭で過ごすという体験は簡単にできることではなく、普通では体験することのできない特別な時間を過ごせる、この事業に参加できたことに心から感謝しています。

また、メンケファミリーの長男クリスチャン君がこの秋から日本の大学へ半年間通うとのことで、年末には家族で日本を訪れる予定と言っていたため、メンケファミリーと再会出来ることを今から楽しみにしています。そして、来年日本にヴォ市の青少年が来たときは、同じように日本の家庭を楽しんでもらえるよう、今回の経験を生かしたいです。

バイエルン人

吉川 尚孝

大学でドイツ語を学んでいるとはいえ今回が初めてのドイツで不安と緊張、そして期待で胸がいっぱいでした。しかし、ホストファミリーをはじめとして、ヴォ市の方々は我々派遣団に非常に親切にしてくださり、今まで両市の間に築かれてきた友好関係の賜物だと感じられました。

机上で学んでいたこととはいえ、やはり、ドイツは州としての意識が強く特にバイエルンは 1871 年の統一に最も反対したバイエルン王国であり、ホストファザーのペーターが言っていたように旧東ドイツのようなソ連による支配を経て変化した歴史の浅い州に比べ、自分たちに強く誇りを持っているということが強く感じられました。

バイエルンはドイツでなくバイエルンであり、バイエルン方言はドイツ語でなくバイエルン語であり、バイエルンの人々はドイツ人でなくバイエルン人だ、ということはこの滞在の中で何度も感じました。ドイツ到着後のウェルカムパーティーでもホストマザーのヘルガと話したときは分からない単語はあれど、簡単な会話なら出来ました。ただヘルガが言うように生粋のバイエルン人であるペーターの話すことは聞き取れず、苦労しました。ペーターがバイエルン語で話した後ヘルガがドイツ語で言い直すということが何度あり、日本で学ぶ高地ドイツ語とバイエルン語との違いが身に沁みました。ヘルガも息子のゾナーも、またミュンヘンから通訳の手伝いをしに来てくれたアレックスもバイエルン人が話す言葉は分からないことがあると言っていました。バイエルン人についてペーターは、真っすぐな人柄で物事をはっきりと直接的に話す、と言っていました。これは日本のような「沈黙は金なり」や「口は災いの元」といった言葉を語らないことを美德としたり間接的な言い方をして関係を保ち、作り上げていく文化とは全く正反対のものです。同時にペーターは、バイエルン人は冗談を言うのも好きだと言っていました。その冗談もバイエルン語なため、簡単なドイツ語かあるいは英語で言い直してもらう必要がありましたが、しばしば冗談を交えては自分と

仲良くしてくれようとしてくれました。他のヴォ市の方も（中でもバイエルン人は）とても陽気で、特に宴会の場面ではいつもニコニコしていて大きな声で笑うのでこちらも楽しくなりました。ペーターとゾナーはバイエルンに数百年前から存在するバイエルンの軍隊のフェアアイン“Gebirgschützenverein”（フェアアイン：幅広い種目、分野におけるそれぞれ規模も異なった愛好協会のようなもの）に属しており、しばしば銃を持って楽器を奏でながら行進したりしているようです。実際に昔使われていた銃をそのフェアアインが所持しており、ゾナーの部屋にも置いてあるのを見せてもらいました。このフェアアインは非常に由緒があり格式高いものでペーターはミュンヘンにロシアのプーチン大統領が来訪した際、空港で空砲を慣らし迎えたそうです。目の前にプーチンが立ったと語ってくれました。↓写真は帰国後ヘルガから送られてきたもので、一番左の旗を持っているのがペーター。まさにこの格好で活動するようです。



言葉の面でも、バイエルン人は誇りを持っており、それが表れています。最後にこのバイエルン語で教えてもらったものを二点紹介します。

- (s) Schwamal : 何もできない人の事 運転中前の走行車がゆっくり走っていてその車を指す際に使いました。「あんぼんたん」のような感じかなと思いました。

- Oachkatzerschwaf : 直訳だとリスのしっぽ。一種のジョークで、これを聞いて反応した人はバイエルン人、反応しない人はそれ以外のいわゆるよそ者として見分けがつくそうです。単純に長くて発音が面白いだけであって、単語そのものに意味はないとのこと。高地ドイツ語だと(r)Eichkatzschwanz だけど、こちらは言わない。

国際交流を考える

叶 陽菜

12歳の時、ドイツ旅行を満喫していた私は、10年後再びこの地に入間市の青少年派遣団の一員として訪れるなどとは全く思っていませんでした。大学に入り国語国文学を専攻しながらも、国際交流に興味があるので、市報で今回の事業の募集を見かけた時、あの時は観光だけで現地の方と交流することができなかったのも、もし機会をいただけるのであれば今度はぜひドイツの方とコミュニケーションをとってみたいと思い応募を決めました。お恥ずかしながら今まで入間市の国際交流事情にはあまり明るくなかったのですが、今回の経験を通じて、入間市とヴォルフラーツハウゼン市がとても良い、深い友好関係を築いてきたのだということがとてもよくわかりました。ミュンヘン空港で出迎えてくださったクラウディアさんをはじめとする市の方々は、おもてなしの心いっばいに私たちを迎えてくださいましたし、それに続く歓迎会、クラウス・ハイリングレヒナー第一市長やホストファミリーのゾーエ、フリッツ、クララとの出会いなど、この9日間は、どの場面を切り取ってもヴォ市の方々の思いやりにあふれていたものだったと思います。第一市長さんによると、入間市はヴォ市の姉妹都市の中で関係の長さは2番目であるものの、一番盛んに交流している市とのことでした。市庁舎には、過去に入間市から贈られたたくさんの記念品が飾られており、私たちの滞在中には入間市のマークの旗も掲げてくださっていました。



今回の派遣事業ではホストファミリーの家に滞在して寝食を共にするという貴重な体験をさせていただきましたが、私のファミリーになってくれたゾーエ、フリッツ、クララには本当に感謝しています。ゾーエは大学の試験期間中で忙しかったにも関わらず、帰り際には空港まで見送りに来てくれましたし、フリッツはいつも明るく話しかけてくれ、クララは美味しい料理を用意してくれました。ワインが大好きなフリッツは私にも勧めてくれたのですが、私があまりワインを飲んだことがないと言うと小さなワイングラスを用意してくれました。ゾーエはそれを使ってワインを飲む私が面白かったようです。



今回の経験を経て、交流は感謝の心で発展していくのだということがよくわかりました。今私には、メラ一家の皆さんやヴォ市の方々との関わりの中で感じた恩や感謝の気持ちを、次回ドイツから派遣団が来た時におもてなしという形で表したいという気持ちが強くあります。今までの双方の派遣団も同じ気持ちを抱いてきたからこそ、入間市とヴォ市の交流が長い間途絶えることなく続いてきたのでしょう。国際交流とは何か、と聞かれたら定義をするのは難しいように感じていましたが、このような気持ちをお互いに抱くことなのだと、今回身をもって理解することができました。お別れ会で披露させていただいた書道の題材として「感謝」を、お土産として作った栞に書く文字として「感恩戴徳」を選びましたが、ぴったりだったなと思います（字の上手さは微妙ですが笑）。一生の宝物になる経験を本当にありがとうございました！ Danke!!!



初めてのホームステイ

川合 優香

今まで海外に何度か行ったことはありましたが、ヨーロッパに行くのは今回が初めてだったので出発前からとても楽しみでした。私の中でのヨーロッパは建物がきれいで町全体が統一されているというイメージでした。実際にドイツに行ってヴォ市とミュンヘンの街並みを見ると、私のイメージ通りでとても嬉しかったです。クラウス・ハイリングレヒナー第一市長の話によると古い建物は保護する法律があるため建て替えるとしても元と同じにするか、外側はそのままにしないてはならないので自分勝手には建てられないそうです。ヴォ市は街並みもそうですが人も暖かく初日の歓迎会から私たちを優しく迎え入れてくれたので、次の日からの派遣事業がとても楽しみになりました。また、出発前はホストファミリーとちゃんと交流できるか不安でしたが、ゼラフィナがすぐに私を見つけてくれて笑顔で自己紹介してくれたので安心しました。歓迎会が終わった後家に連れて行ってもらいリビング、キッチン、バスルームや私が泊まる部屋などをゼラフィナが丁寧に説明してくれました。ゼラフィナは家族とは別の家に住んでいたため朝食と夕食のときは一緒に食べるためにわざわざ毎回来てくれました。ホストファミリーの家での朝食はパンでした。初日に普段朝食は何を食べているか聞かれたのでご飯を食べていると言ったらすごくびっくりしていました。



ホストファミリーの家はヴォ市の中心街にあるためクラウディアさんがいつも歩きで送り迎えをしてくれたので、途中で知り合いに会うと私を紹介してくれた

訪問団報告書

のでたくさんのヴォ市の人たちと交流することが出来ました。クラウディアさんの友達でカフェを営んでいる方と話をしたとき、日本のことについていろいろ聞かれたのですが、その中で日本人は緑茶を飲むときミルクや砂糖は入れないのかと聞かれたので何も入れないと言ったら驚いていました。ちょっとしたことでも文化の違いがあって、日本人が持っていない価値観や感覚を持っている人と話すことで新しい発見があってとても楽しかったです。



お別れ会の時折り紙で鶴とハートの折り方をホストファミリーに教えたらすごく興味を持ってくれて何度も折って折り方を覚えてくれました。もっとうまく折れるように練習すると言ってくれたのがとても嬉しかったです。お別れするときグンターさんとクラウディアさんが見送りをしてくれました。出発前はこんなにホストファミリーと仲良くなれるとは思っていませんでしたが、マルホルト家のおかげで毎日充実した日々を過ごすことができました。



「大好き」が増えました

伊藤 望

8月1日からの約10日間は長いようで短く、しかしとても充実していました！1日のスケジュールはどの日を見てもとても忙しく、内容もとても濃く、今振り返ってみても、よくこなせたな…とってしまうほどです。そんなタイトなスケジュールをこなせたのも、ヴォルフラーツハウゼン市の市長であり、私のホストファザーでもある、クラウス・ハイリングレヒナー第一市長をはじめとする市役所の方々や、私たちが安心して過ごせるようにといろいろと工夫を凝らしてくださったホストファミリーの方々のおかげです！

出発が近づくにつれて、楽しみな気持ちがどんどん膨らんでくる一方、10日間もの間、ホストファミリーやヴォ市の青少年たちとどのような会話をすればいいのか、またもしもホストファミリーの方が怖かったらどうしよう、さらには元々英語に自信がなかったので、不安で不安で押し潰されそうでした。でもホストファザーの(私たちの間では)トレードマークである、あのスマイルを見たら、緊張が一気にほどけ、リラックスして過ごすことができました！ハイリングレヒナー家は本当に優しい素敵な家族です。この10日間で大好きになりました！ホストマザーが山登りに行っていたこともあり、ほぼ毎日ホストファザーとアンナと一緒に過ごしていましたが、一緒に近くのお祭りへ行ったり UNO をしたりマカリナのダンスを教えてもらったりと、とっっっても楽しく過ごせました！



先ほど笑顔で緊張がほどけたと書きましたが、やはり不慣れな英語を話すということもかなり構えていました。しかし私が理解できるような簡単な言葉を選んで話してくれて、とても助かり嬉しかったです。ホストファザーは市長なので壁ができてしまうのでは、と少し心配していたのですがお家の牛たちを紹介してくれたときから、なんだか話しやすく感じていました。牛舎に4・5頭、放牧で8頭ほどいて、みんな名前は付いておらず、近くファームへ行く牛たちもいるそうです。



みんな私と同じで食欲旺盛でした。笑

もうあの笑顔に会うことが難しくなるのだと考えていると、自然と涙が浮かんで来て、バスに乗る前に泣いてしまいました…。でも一番早くて、万燈祭り。もし会えなかったとしても、またヴォルフラーツハウゼン市に行ってみたいと思っているので、そのために英語とドイツ語を勉強しようと思います！！

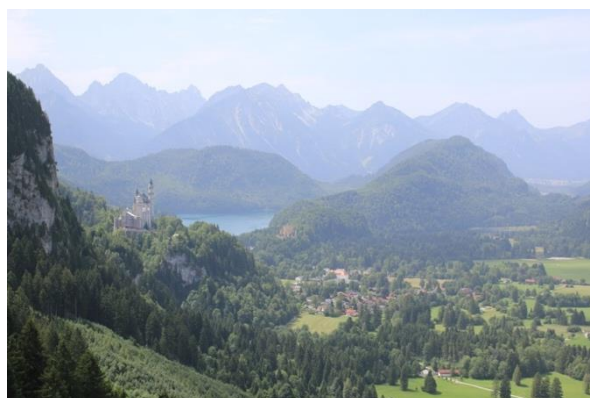
また今回この派遣事業に参加して、入間のメンバーや、ヴォ市の方々、たくさん素敵な方たちに出会うことができました。こんな貴重な体験をさせてくれた親に感謝すると共に、この体験を、友人などたくさんの人に伝えたいです！

優しく落ち着く、ヴォルフラーツハウゼンが大好きです！！

バイエルンでの体験

佐藤 達哉

8月2日、ドイツ有数の大都市ミュンヘンを抜けると、今まで見たことがない光景が広がっていました。鮮やかな緑の草が生い茂る牧場に、赤色屋根の美しい家が建ち、バルコニーには花々を生けている。街や景色など見るものすべてが鮮やかに映り、本当に美しいところでした。



私のホストファミリーの家族構成は、母親のマリオン・クレメントさん、そしてヨナス君、マティス君兄弟です。スミラさんという名前のホワイトシェパードも家族の一員です。ヨナス君とマティス君は、とても真面目な性格です。2人ともやはり英語が流暢で、私が知らない単語も多く出してくれます。私も英語が苦手ながらも、簡単な英語でコミュニケーションをとることができました。



クレメント家は、ヴォ市中心部から少し離れた川のほとりにあります。スミラさんは泳ぐのが好きだそうで、橋の上から木の枝を投げると、川に飛び込み枝を拾って戻ってきます。何ともアクティブなスミラさんです。



クレメント家の家の中はどこを見ても、埃の一つもありません。インテリアもまるでモデルハウスのようです。家だけでなく、ライフスタイルも私が最も憧れるものでした。夕食を食べ終わると、空が暗くなっていくのを眺めながら庭のベンチに座り、マリオンさんとスミラさんとゆっくりとした時間を過ごすのが日課です。ホストファミリーと1日を過ごした日は、

スミラさんと山に散歩に行きました。私は何よりも、このようなのんびりとしたゆとりのあるライフスタイルに強く憧れるようになりました。

私の今回のドイツ訪問における学習テーマは、消防団の実情と自助共助の意識形成をドイツで学ぶというものです。表敬訪問で、ハイリングレヒナー第一市長に私の学習テーマについて話すと、なんと本来は予定になかった消防団への訪問スケジュールを急遽組んでくださいました。

消防団の訪問では、消防車に乗って実際に市内を走行するなど、日本ではできない貴重な体験をさせていただきました。隊長のグラフさんは、私がこの学習テーマについて追い求めていた答えを教えてくださいました。その答えとは、「人を助けたい。手伝いたい。それができたら嬉しい。」というバイエルンの人々に根付く「文化」そのものが、自助共助の意識を形成していたというものでした。



私が現地で出会った方々は、ドイツ人としてではなくバイエルン人としての自覚を強く持っていることがわかりました。街を見回しても、ドイツ国旗は殆ど見当たらず、水色と白のツートンカラーのバイエルン旗が掲げられています。まるで、バイエルンがひとつの国であるかのようです。



お別れ会では、二人羽織の最初の実演で、夢源さんと組み、二人羽織での化粧を披露しました。口紅を夢源さんに顔中に塗られ、私はまるでゾンビのようでしたが、お別れ会を盛り上げることができたのが何よりです。

今回の、ドイツ訪問を一文字で例えれば、それは「夢」に尽きます。美しいバイエルン・ヴォルフラーツハウゼンの地で、ホストファミリーと過ごし、そして貴重な体験をした日々、その全てがまるで夢のようでした。

最後に、今回お世話になった全ての方々に深く感謝を申し上げます。

素敵なホストファミリー

古谷 晶

ヴォ市はとても素敵なおところでした。住みやすい街で市民の皆さんも優しい方が多く、緑豊かで穏やかな場所でした。8日間毎日スケジュールがつまっている中、市役所の方々を始め、ホストファミリーやその周りの方々がとても親身に関わってくださり、短い間でしたが、とても楽しい濃い1週間となりました。

ホームステイは2回目だったのですが、ドイツ語の学習経験が皆無だったことや初めてのヨーロッパで少し不安を感じていました。しかし、ハインリッヒ家はとてもフレンドリーで子供も多くいたので、すぐに馴染むことができました。最初の方は久しぶりの英会話で全然話すことができなくて、自分の意思が伝えられず、もどかしい思いをしていました。しかし、伝わらなくても少しでも多く会話をしよう！と思い、積極的に会話をしていくように努めました。ホストファミリーが私のつたない英語を理解しようとしてくれたことは、とても嬉しかったですし、感謝しています。

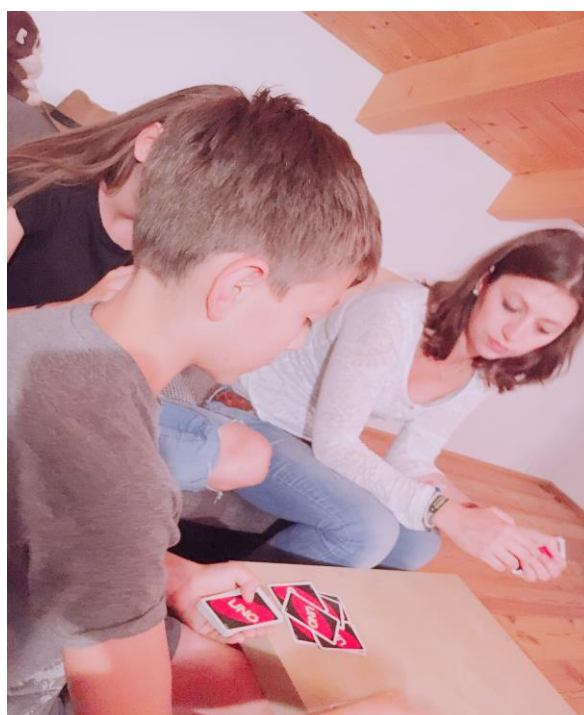
ホストファミリーは営農家で子供が4人いました。家に羊が200匹もいて、朝は鳴き声で起きたほどです。羊の赤ちゃんにミルクをあげたりえさをあげたりすることができました。



子供が4人いて22歳から12歳まで女の子3人、男の子1人の仲のいい姉弟でした。12歳のアンドレアスは英語が苦手だそうです、それでも私に一生懸命英語で話しかけてくれました。アンドレアスはこの一週間で英語がとても上達していました。家族たちもアンドレアスの英語の上達に驚いていました。

ホストファミリーとは午後の遅い時間まで遠くへ出かけたり、サイクリングを楽しんだり、一緒にゲームをしたりと楽しい時間を過ごすことができました。中でも一緒にUNOをやった思い出が強く心に残っています。

ハインリッヒ家にはとてもお世話になりました。この家に滞在出来て本当によかったなと心から思います。ホームステイを受け入れてくださったことに感謝していますし、また会いたいなと心から思います。今度日本に来るそうなのでその時はたくさん案内したいです。



この事業に参加し、普段では体験できない事をたくさん経験して、人生で最も濃い1週間になりました。ホストファミリーと過ごした時間やプログラムなどが全てが私の宝物です。入間市やヴォ市の市役所の方々、また家族のおかげで今回の派遣事業に参加できたことに感謝しています。ありがとうございました。



Danke schön

水村 光希

ヴォルフラーツハウゼン市ではたくさんの貴重な経験をさせていただきました。初めての海外旅行や現地の方々との交流に対する不安は初日の歓迎会でホストファザーと会った瞬間に払拭されました。それは人柄の良さがすぐに感じ取れたからでした。ホストファミリーのみんなとお家で会った時にはこれからの一週間に対する不安は完全にといいほど無くなりました。

食事に関しては日本では食べることができないものばかり。obazda というバイエルンの伝統的なチーズがお気に入りです。一番好きな食べ物は何かと聞かれたら私は obazda と答えるくらい好きになりました。あらゆるご飯がおいしかったのでいつも lecker!! と言っていたら最終日にはホストファミリーに I miss your “lecker” と言われました。

ホストファミリーの青少年は私より年下で体を動かすのが大好きでした。二人が好きな卓球はやったことはあるけど苦手だしトランポリンなんてやったことない、ドラムだってできるわけない、見ているだけでよいと思ったのですが、やり方がわからないといえばセバスチャンとクリスティーナが丁寧に教えてくれました。全然できなくても「僕だって最初はできなかったけどたくさん練習してできるようになったんだ。何回失敗したって大丈夫だからやってみなよ。」と。失敗するとうまくいかないポイントも的確に教えてくれ、トランポリンでできなかった動きができるようになると「すごいね、上手だね。」と言って家族みんなが喜んでハグまでしてくれました。卓球もドラムもわかりやすく教えてくれました。

私がドイツ語を大学で学んでいると言うと、たくさんの言葉を教えてくれて、日中覚えた言葉を家で使うととても喜んでくれ、毎晩寝る前に Ich wünsche euch eine gute Nacht und schlaft schön. と行ってハグするのが日課となっていました。またバイエルンの方言を使うと上の年代の方と仲良くなりやすかったのでよく使っていました。発音も何回も教えてくれ、私もいつかドイツ語で

会話できるようになりたいと思い、ドイツ語学習に対するモチベーションもあがりました。

私は新しいことにチャレンジする毎日が楽しくなっていました。今までの私は失敗を恐れて挑戦を避けてきていたのですが、恐怖心よりも体験できる喜びが大きくなっていました。ルップ家のみんなに教えてもらった、『できるまでやる楽しさ』を忘れていないので挑戦し続けたいです。

いつも「お気に入りだ」といつてくれたとてもチャーミングな Stefan、いつも温かい笑顔で迎えてくれた Ingrid、ドラムを演奏してくれたり毎日卓球をしたり、たくさん話した Sebastian、たくさん一緒に遊んだりいつも倒立をされていてアクティブな Christina。まるで本当の家族のように過ごすことができよかったです。「ここはあなたの家だからいつでも来てね。」と言ってくれて本当にうれしかったです。早くまた会いたいです。本当に感謝でいっぱいです。

別れるときは淋しさと感謝の気持ちで涙が止まりませんでした。



そしてこのプログラムに参加させてくださり本当にありがとうございました。ヴォ市の協会の方や通訳のアレックスさんも私の名前を覚えてくださったり、本当にフレンドリーに接して下さりました。私自身の家族の理解も無くてはならないものでした。入間市や交流協会の方だけでなく団長の岩崎さん、通訳の和田さんも充実した一週間をありがとうございました。皆さん仲良くして下さりありがとうございました。一生忘れることのない思い出になりました。

30年の絆、そして未来へ

和田 千寿

三年ぶりに降り立ったミュンヘンはドイツらしからぬ強い日差しと生ぬるい風。昨今は地球温暖化の影響で気候が変動している。夕方には雷を伴った夕立にも見舞われた。歓迎パーティーは入間でお会いしている、ホルツフォイ第三市長の弟、フ란ツさんのお店。私にとっては何もかもが懐かしい。ハイリングレヒナー市長をはじめ、ホストファミリーの皆様の温かい歓迎を受けて青少年たちもすっかり安心したようにみえた。今回は全員が大学生なので極力本人たちの自主性に任せて見守りましょうと岩崎団長と話した。翌日の市長表敬訪問の席では青少年の皆さんが各自の活動テーマを市長の前でしっかりと発表した。特に佐藤くんは消防団への強い興味と訪問したいとの熱い思いを語った。その後、彼の思いに応えるように追加プランとして市長自ら手配してくださり、私たちは消防団を訪問することができたのだ。消防車に試乗することもできた。佐藤くんは消防団のユニホームに身を包み、責任者の方にいつまでも熱心に質問をぶつけていた。彼の夢が叶って本当によかったと誰もが思った。私個人的には難民支援センターを訪問し、紛争地帯から遠く離れた日本に住み、日ごろ難民問題を身近に感じることでできない私たちが実際にアフガニスタンやシリアからやって来た難民たちと会えたことに非常に感動した。実際に直に聞いた話はどれも衝撃的だった。また、ヴォ市の前向きな受け入れ体制にも感銘をうけた。青少年たちも積極的に英語で質問したり会話をしたりし、また一緒にケーゲルを楽しんだ。入間では経験のできない貴重なプログラムだったと思う。また、ジムナジウムでもパン工房でも青少年たちは英語で積極的に質問をされていて大変頼もしく思った。お別れパーティーにおいては各自が役割をきちんとこなし段取りも後片づけも自主的にばっちりこなしていたので感心した。アトラクションの習字は陽菜ちゃんと晶ちゃんが活躍で素晴らしかったし、二人羽織では達哉くんと夢源くんのデモンストレーションがうけていたし、ジェスチャーゲームも大変盛り上がりでドイツと日本が心を一つに楽しめたと思う。優香ちゃんと望ちゃんの司会も見事だった。尚くん

は常にドイツ語で積極的に交流をはかり光希ちゃんは日夜バイエルン語の習得に努めていた。本当に頼もしく素晴らしいメンバーだったと思う。

そして、私と岩崎さんは毎夜、公式プログラム終了後にいろいろな方々のお招きを受け大変お世話になった。この場で今一度感謝申し上げたい。

去年の万燈訪問団が入間でのことを今でも大切に懐かしんでいる様子に私と岩崎さんは嬉しいねと話した。



2016 年度万燈訪問団と。

また、今回大変お世話になった友好協会会長のヴィゲールさんと友好協会会員のカルメンさんが10月の万燈訪問団として来市されるので心を込めてお迎えしたいと思う。最後に日曜日の夕方から私がドイツのママと慕っているゲルディーさんのお宅を訪問し、ご主人（私のドイツのパパ）のお墓参りをする事も叶った。長女のモニカさんとアメリカ人のご主人、グレゴリーさんも加わり美味しい夕食をご馳走になった。ドイツ語と英語とバイエルン語が飛び交い、いつまでも話の尽きない楽しい一夜となった。同席の岩崎さんもあっと言う間に打ち解けて家庭料理を楽しんでいるようだった。また、今回わかったことなのだが、モニカさんと私の誕生日が、モニカさんが1962年4月12日で私のが同年、4月21日だと判明し、一気に打ち解けて姉妹のように仲良くなれた。ドイツにママだけでなくお姉さんができたのだ。私たちは帰国後も頻繁に連絡を取り合っている。いつの日かモニカさんご夫婦を入間にお迎えしたいと思っている。

また、ゲルディーさん宅の玄関のドアの前にファミリーの名前が書いてある石が置いてあり、なんとその中に私の名前もあったのだ。嬉しい発見となった。



ファミリーの石。



姉妹都市提携から30年、両市の絆は驚くほど深く強い。今回もその友好関係の深さを再認識する訪問となった。何としてもこの両市の交流を未来に繋げて行く使命が私たちにはあると思う。特に若い方に国際交流協会で活躍し未来の交流事業を担っていただきたいと切に願う。

今振り返ると盛りだくさんのプログラムにヘトヘトになりながらの9日間ではあったが、通訳として参加する機会をいただき、岩崎団長と8人の青少年の皆さんと同行出来て光栄でした。

両市長をはじめ、全ての関係者の皆様へ心より感謝申し上げます。

素晴らしい青少年異文化体験訪問団派遣

岩崎 聡

平成 29 年度の青少年派遣は、12 名の応募があり選考の結果 8 名の訪問団が結成されました。忘れてはならないのが、昨年も青少年派遣が予定されていましたが、出発直前にバイエルン州で爆発事件等が立て続けに発生し、安全を最優先に考え、派遣中止の決断が下されました。市・協会ともに再び青少年たちの夢を実現してあげたい思いをヴォ市側に伝え、クラウス・ハイリングレヒナー第一市長から、早々と「来年度にヴォ市に来るのを楽しみに待っているよ」との回答をいただき、思い入れの強い本年の派遣事業が実現することとなりました。

出発まで青少年たちは、定期総会等で抱負を述べ、4 回の事前研修に取り組み、この辺りまでは緊張の連続だったのでしょうか。

私は訪問団長に指名されましたが、滞在中に事件が発生しないか、市を代表して交流が出来るのかの不安もあり、一番緊張していたかもしれません。



しかし、約 12 時間のフライトを終え、ヴォ市での歓迎会で陽気な市民に温かく迎え入れられて安心したのと、青少年たちが初めて会うホストファミリーに緊張しながらも一生懸命に会話を試みる姿を見て、この派遣事業を成功させるために頑張ろうと思ったのを覚えています。

プログラムは、夏でも過ごしやすい気候と聞いていたはずが、連日猛暑で、エアコンのないパン工場では、汗?の塩を効かせたプレッツェル作りに奮闘し、店長のパンを食べたい人のために深夜 1 時から働き、その後はハチミツ作りに励んでいる話に感銘を受けていました。また、難民センター訪問では、実際の難民から 2 か月かけてドイツまで歩いてきた等の話が聞け、身近な問題に感じていました。たくさんのプログラムにテーマ学習と多くのドイツ文化を吸収するために真剣に向き合い、ヴォ市通訳者アレクサンドラさんに、私も含めてたくさんの質問

をして、青少年たちにとって実り多き学習ができたようです。

お別れ会では、試行錯誤しながら企画した書道・狭山茶紹介、二人羽織・ジェスチャーゲームでヴォ市民と共に盛り上がりました。

青少年たちのもう1つのプログラムであるホームステイは、ホストファミリーに家族のように迎え入れられ、積極的なコミュニケーションと順応性で、とても楽しい時間を過ごせたようです。その証拠に、滞在中の朝は、ホストファミリーと一緒に集合をしますが、日増しに本当の家族のように、集合してくることで分かりました。また、私は青少年のホームステイ先での過ごし方が気になり、皆に話を聞くと「〇〇へ行ってきた」「〇〇を食べた」など、とても満喫しているようで、最後はどんな楽しいこと体験しているのかが気になってしまった程です。

この青少年派遣事業は、ドイツの観光地ホテルに泊まり、観光名所を巡る旅も良いですが、ミュンヘンから郊外の小さな都市で、人の温かさや実生活に触れ体験できる素晴らしさがあります。国際化社会に向けての人材育成に対しても、世界に目を向け夢を持つ青少年に、そっと肩を



を押してあげる一役を担っていると感じました。そして、今回参加した素直で明るい青少年たちは、両市との友好関係を深めてくれたことは間違いありません。

また、姉妹都市提携30周年を迎えた両市は、これまでの交流の積み重ねが、深い絆を作り上げていることを感じました。

最後になりますが、両市の多くの方のご理解とご協力により、無事に派遣事業が終了できたことと、この様な貴重な経験が出来る機会を与えてくれたことに感謝申し上げます。



また、和田さんには、通訳以外に青少年と私の相談役にも徹してくれてありがとうございました。そして、8名の青少年のみなさん、積極的にコミュニケーションを取る姿が頼もしかったです。これからの活躍に期待しています！

ギムナジウム、ドイツの古い建築物から日本の建築問題を考える

片山 夢源

私は今回のヴォルフラーツハウゼン市派遣を通して「ドイツの教育制度」について学びました。ドイツには日本とは大きく異なるギムナジウムという教育制度があります。これは10歳時点での成績と希望を踏まえ、進路を決めるという制度です。

先ほど私はギムナジウムという教育制度と書きました。しかし、正確に言えばこの言葉は正しくありません。日本語ではドイツの教育制度の総称的に呼ばれる「ギムナジウム」とは正しくは大学を志す進学校の呼び名です。ドイツにはギムナジウムのほかに「実科学校」「基幹学校」といった進路があます。これらは前述した通り、基本的には10歳時点での成績と希望で決められるもので、後から試験を受けて進路を変更することは可能ですが、概ね子ども達は10歳時点で決めた進路へと進むこととなります。

このドイツと日本の教育制度の違いを才能主義、努力主義などと表現したりもするようですが、この教育制度を現地の人々はどのようにとらえているかを聞きました。そこで挙げられた意見として市長が述べられたことは、ドイツ人からしても、10歳での選択は早いというものでした。この制度では本人の考えよりも、家族や周囲の圧力を強く受けてしまうという意見や、10歳時点の学力だけで判断するのは早すぎるなどといった考えを持つ人もいました。しかし、教育制度に関しても州ごとに差があり、進路の決定を遅くすると、学力に地域差が出るという、連邦国家ならではの問題があることも分かりました。

しかし、進路に関しては一度働いてから再び学校に戻るなど、一度、選んだ他の進路から変更することも可能で、私のホストファミリーのお父さんがそういった直接ギムナジウムへと進学する生徒以外を受け入れる学校の教師をしていました。今回の学習ではホストファミリーのメンケさんの協力もあり、当初は予定になかった学校訪問を行い、そこでドイツの学校の特徴と教育制度についてメンケさんより説明していただきました。

第二にドイツの古い建築物から日本の建築問題を考えます。

【学習の記録】

昨年、私が大学で空き家問題を学び、日本の中古住宅の流通シェアが低いことを知りました。対して、ドイツは非常に中古住宅の流通シェアが高い国です。では日本とドイツにはどのような差異があるのか、その違いをより建物の特徴がはっきりと現れる古い建築物から考えました。



まず、分かったことは建物自体の耐久力の差です。ドイツは住宅の耐久年数を百年として家を設計するのに対し、日本では木造二十七年、鉄筋三十七年と元来の耐久年数が半分以下ということです。そのため、そもそも中古住宅となる時点で、耐久年数が厳しい日本に比べ、同じ年に建てても耐久年数に余裕のあるドイツの中古住宅の方が流通しやすいということが分かりました。

ドイツには街中であっても築数百年の建物がごろごろあります。これは法律により、建て替えられないよう規制されていることもありますが、その他にも環境による違いがあるとも感じました。その理由の一つとしてドイツには地震が無いこと。また、湿度も低く、川沿いの家の地下室であってもカビ臭さを感じないなど、住宅を傷つける要素が少ないと感じました。

これらの調査からまとめると、この問題に関しては、当初、住宅の価格が似ていながら、中古住宅の流通シェアが高いドイツは日本の住宅問題に対し、大いに参考になると考えました。しかし、実際には環境差を考えるとドイツの住宅を参考にするのは難しいと感じ、参考にするならば、日本の古い住宅から学ぶ必要があると感じました。

ドイツの生活習慣・買い物文化

吉川 尚孝

「生活習慣について」

日本と比較するうえでドイツと日本の位置、すなわち緯度の違いについて考えておかなければならない。ドイツは日本よりもはるかに高い緯度にある国だ。そのため日が長く、夏は夜 21 時 30 分ほどでやっと夕暮れを迎える。冬は日本と変わらず 17 時ほどという。日が長いということは遅くまで明るいということで、仕事の後もそれぞれ自分のための時間を楽しんでいるように感じられた。労働時間に関しては、BMW では 8 時間労働、残業は 2 時間まで。すなわち最大で一日 10 時間までと定められている（ルフトハンザ航空も同様）。これに違反すると会社側に罰金が課されるとのこと。そのため定時になると上司が部下に早く帰るよう促すそう。特に面会や取引などの約束がなければ 8 時でなくても 9 時くらいに出勤してもよい。法律で決まっている面もあり、商店などは夜 19 時には閉まったりと、もちろん仕事にもよるが、朝早くから仕事を始め、早い時には昼や 15 時くらいには仕事を終えるということも珍しくない。日本と異なり、夕飯は家族で食べるということが多く、夏には庭先でバーベキューをすることも多いそう。平日にも関わらず、22 時くらいまで通り全体を使って ステージを作り野外ライブをしていたりと夜の過ごし方は非常に充実している。



リゾート地とされる町 Bad Tölz
にて。奥がステージ。多くの人で溢
れかえっている。撮影時刻 21:27

【学習の記録】

日中は電気をつけない。夜は流石に電気をつけるが、暖色系のスモールライトほどの照明で日本ほど明るくない。キャンドルを使うこともある。



市長表敬訪問の際の議会室。明かりは窓からの日光のみ。照明は付けず、この状態で進行された。 撮影時刻 9:15 頃

「買い物について」

以前は小さな個人経営の商店や市場で買うことが多かったが、スーパーなどの大型店舗が増え、小さな店は閉まらざるを得なくなっている。確かにスーパーの方が安価で商品を購入できるが、地産地消の観点から従来の商店の方が良いという考えもある。また、ドイツはリサイクル大国と言われるだけあり、非常にエコである。レジ袋は有料。レシートは声をかけないと出さない店舗も多い。一つの物を長く使う意識もある。またペットボトル容器に予め容器分の代金が掛かっており、空の容器をお店に返却すると一本当たり 50 セントキャッシュバックされるという取り組みもある。値段より質を重視する Bio 商品（有機製品）が近年非常に人気であり、少し値は張るが体に良いものを購入する傾向にある。ただ、大家族など大人数を養わなければならない場合はもちろん全員分購入できることが優先。日本では、日本産が最も高品質と考える人が多いが、ドイツではドイツ産に限らず、質の良い物なら他国の製品を選ぶ。国産がどうかは問題ではない。高いものが必ずしも高品質であるとは限らないようだ。

日本とドイツの置かれた状況から、ドイツの取り組み全てを移植することは不可能ではあるが、それでも見習うべき点が多く見られた。今後の大学での学習・研究にも生きる情報が多々得られた。

「ドイツの言語事情」と「外国人受け入れ体制」

叶 陽菜

①ドイツの言語事情

今回の学習で、一口にドイツ語といってもバイエルン独自の言葉があるなど、一つにくくることは難しいのだということ、そして、日本と大きく違う点の一つに、ドイツの方々は自分の話す言葉に誇りを持っているということが挙げられるのだということがわかりました。それは、消防署を見学させていただいたときに派遣団員の一人が聞いた質問に対して、ドイツの事情は知らないけれどバイエルンではこう、というような答え方をなさっていた方がいらっしまったことや、現地で交流させていただいた方々がバイエルンで使われている表現を好んで教えてくださったことにも表れていると思います。そして、私たちがその言葉を覚え、使うことができた時にとっても嬉しそうな表情をしてくださるのが印象的でした。日本では現在、いくつかの地域の方言話者が減少していますが、これは東京で話されている日本語が「標準」と思われ、方言を話すことはあまり恰好がよくないというイメージを持つ人が増えたことがひとつの原因だと考えられます。日本人の気質上仕方のないことかもしれませんが、多くの人々は他人と同じでいることに安心感を覚え、違う面を持つことに不安を感じます。しかし、ドイツの方々のように自分たちが使ってきた言葉にプライドを持ち、伝えていくことが言語の多様性の維持においては重要なのだろうと強く思いました。

また、今回の派遣期間中、ドイツ語が話せない私は英語を使ってコミュニケーションを図っていたのですが、その中で気づいたことは、ドイツの方々もやはり英語学習者なのだということです。コミュニケーションにおいては一般的な日本人と比較すると格段にハイレベルで、家族間で外国語である英語を用いた意思疎通が可能であるなど、同じ学習者としての差は歴然なのですが、時々文法が間違っていたり、単語が思い出せない場面があるなど、私たちが英語を話すときと同じような問題がドイツの方にも起こりうるのだということがわかりました。

【学習の記録】

②ドイツの外国人受け入れ体制

ドイツでは現在、移民や難民の受け入れに対して特に制限は設けていないため、シリアやアフガニスタン等の国々から多くの人々が移動してくるそうです。ヴォルフラーツハウゼン市にはそういった方々をサポートする施設があり、私が出会った学生の方は2年前に約2カ月かけて渡独し、現在も家族でドイツに暮らしているとのことでした。ドイツに来る前はドイツ語の学習経験は全くなかったとのことですが、彼女たちの現在のドイツ語はレベルが非常に高く、ネイティブである施設のスタッフの方々とも問題なく意思の疎通ができていたようでした。

このような方々がいる一方で、ホストファミリーが教えてくださったのは現在のドイツの受け入れ体制の問題点についてです。移民や難民の人々の多くは教養がなく、就ける仕事に限られています。そのため低収入となってしまうものの、彼らは子どもを多く持つ傾向があるそうで、政府から支給される子どものための援助金で生活ができているとのことでした。しかし、こういった家庭の子どもは学校を中退してしまう場合も多く、それが負の連鎖になってしまっているそうです。こういった事情を踏まえ、バイエルンの政治家の一人は、解決策として移民難民の受け入れ数を制限しようという提案をしているようですが、ではその境界線はどこで引くのか等、熟考が必要な点が多々あります。日本は現時点では移民難民の受け入れ数がかなり少ない方ですが、今後受け入れを考えた際、ドイツの



ように無制限にというのは厳しいのが現実です。ドイツの良いところを取り入れつつ、よりよい方法を模索する必要があります。

【学習の記録】

ドイツの大学、ドイツのパンとソーセージについて

川合 優香

私は以前から海外の大学に興味があり、きっかけは高校の修学旅行でアメリカのUCLAを見学したことです。そのとき大学とは思えないほど敷地が広く建物も大きく私が今まで見たことのある日本の大学とは比べものにならないくらいの規模の大きさに衝撃を受けました。そのときからもっと他の国の大学も見たいと思うようになりました。このことから今回の学習テーマを「ドイツの大学について」にすることにしました。しかし、8月は大学が夏休みであるということなので今回の派遣事業の日程には大学見学はなかったのですが、ホストファミリーがミュンヘンにある大学に連れて行ってくれました。ミュンヘンにはいくつか大学があり、その中でルートヴィヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン（ミュンヘン大学）の建物内を見学することが出来ました。



ドイツの大学は日本とは違い3年間でありこれをバチェラーというそうです。そしてさらに専門性を高めるためにバチェラー課程に引き続いて、あるいは数年間の職業経験を積んだ後に日本で言う大学院のような2年間のマスター過程に進むことができます。州にもよりますが、私立でなければ授業料が無料であり

【学習の記録】

学生証があれば一定の範囲内の公共交通機関も無料だそうです。ミュンヘン大学の夏休みは学部によって異なりますがだいたい8月と9月の2ヶ月間で秋学期（新学期）は10月から始まるそうです。

もう一つのテーマであるドイツのパンとソーセージについては、ヴォ市にあるパン屋さん（ケーニヒドルファーパン工房）でブレーツェル作りをしました。



ここのお店の人は午前1時から仕事をしていて休みは無く毎日お店を開けているそうです。そしてお店にはパンやケーキなど沢山の種類の商品が並んでいてお店の人も何種類くらいあるかはっきりと把握出来ていませんでした。



左の白いソーセージはヴァイスヴルストといいバイエルン州の伝統的なソーセージで、食べるときは皮をはがしてバイエルン風の甘いマスタードを付けます。最初に見本でヴォ市の人に皮をはがしてもらい2本目は自分でやったのですが意外と難しくきれいにはがせませんでした。

ドイツで沢山の経験をする事が出来てよかったです。

【学習の記録】

ドイツの食生活

伊藤 望

ドイツの食べ物はおいしいのはもちろんですが、とにかく量が多いです。一皿に食べきれないくらい盛られています。また、初めて食べるものもたくさんありました。中でも一番作り方が気になったのはこちら→（実際に見るとかなり大きいです。直径は、ペットボトルの底くらい…??）豚肉の後ろにある、お団子のような物です。「クヌーデル」と言って、右がじゃがいも、左がパンです。じゃがいもは生の物と茹でた物が半分ずつ入っているそうです。いろんな方に伺いましたが、作り方はとても難しいそうです…。これはモチモチとした食感で、お肉のソースにつけて食べるととてもおいしいです！ですが先にクヌーデルにソースをつけすぎると、お肉の分が無くなってしまいますので要注意です！



もう一つ！私が好きになった食べ物がこちら↓

「シュペッツレ」と言います。見た目はニョッキのようです。チーズが好きな私にとってはチーズが堪能できる夢のような食べ物です！滞在中ずっと一皿食べてみたいと思っていたので、最終日にやっと食べることができました！1ヶ月分のチーズを摂取できた気がします。



【学習の記録】



もちろんバイエルンの伝統料理、「ヴァイスヴルスト」も食べました！皮をむいて中身を取り出して食べるのですが、結構難しかったです…。これにハニーマスタードをつけて食べるのが通だそうです！

朝ご飯は毎日パンを食べました。そして食卓にはほぼ毎日プレッツェルが出てきました。日本人は、パンと言えば食パンをイメージする人が多いと思います。しかしここバイエルンでは、南ドイツ発祥のプレッツェルが人気のようです。プレッツェルのほとんどは塩がかかっている、私は食べ慣れていないので、しょっぱすぎるように感じました…。ハチミツにつけたらちょうどよかったです！



最近の日本の食卓には和洋中様々な料理が並びます。ドイツはお米が主食の日本とは違い、パンやパスタなどの小麦系の食べ物が非常に多かったです。また、この地方は内陸ということもありお肉料理も多かったです。私はいわゆるジャンクフードが好きなので食生活は合うと思いますが、ドイツの方のようなスタイルではられない気がします…笑 国ごとに主食が違うというのは簡単に想像が付いたのですが、ドイツの北と南の食文化ではどのような違いがあるのか調べたいです。

消防団の実情と自助共助の意識形成をドイツで学ぶ

佐藤 達哉

昨今、関東各地において地震、土砂災害、洪水、竜巻などあらゆる自然災害が立て続けに発生しており、私たちが住む入間市においても災害対策の重要性がより一層高まっていると考えております。

ドイツでは、市民が主体となって、防災活動に取り組んでいます。ヴォ市をはじめとする小規模都市では、消防組織はボランティアによって維持されています。私の1つ目の学習テーマは、その消防団の実情を知ることでした。2つ目の学習テーマは、ドイツの人々に根付く自助共助の意識の根底に何があるのか、何がそれを形成するのか、そしてどのようにすれば我々の地域社会において自助共助の意識を培うことができるのかを明らかにすることでした。日本の自主防災組織や消防団は、構成員の高齢化によって活動の維持が困難となることが予想されます。しかし、災害の多い日本においては、一般市民の自助共助による防災活動が、特に重要であると考えております。

私は、現地でホストファミリーの青少年全員に対してアンケート調査を実施し、防災教育の実情と防災意識への影響を調査しました。また、ヴォ市の消防部門の方からお話をいただくことができました。そして、ハイリングレヒナー第一市長のご厚意でヴォ市の消防団を訪問する機会もいただくことができました。



ヴォ市には2隊の消防団が存在し、隊員数は80名程です。ボランティアなので、報酬はありません。普段は、一般の人と同じように会社などで働いています。消防団は、火災から山岳、水上の事故まで、あらゆる事案に対応し、高度な技術

【学習の記録】

を有していると思われます。最初の車両が出動するまでの時間も5分かからない
そうで、日本の消防隊に引けをとりません。

現地の学校では、日本の小中学校で行われている防災訓練をはじめとする防災
教育は、ほとんど行われていないことがわかりました。つまり、自助共助の意識
に影響を与える要因は他にあったということです。

根底にある考え方として、「人を助けたい。手伝いたい。それができたら嬉しい。」
というものがあります。ヴォ市そしてバイエルンの地域コミュニティの
結束力が、このような助け合いの精神の形成に貢献しています。さらに、これは
教育によるものではなく、バイエルンの人々に根付く「文化」そのものであった
のです。

私は、バイエルンの地で、防災政策に関する重要な事実を知ることができまし
た。それは、自助共助の意識を培う上で、小中学校における防災教育や地域住民
に対するリスクコミュニケーションといった防災政策的アプローチだけでは
不十分であるということです。求められるのは、地域コミュニティの結束力強化
とボランティアに対する意欲の向上であります。それを可能とするのが、ボラン
ティア意識の大切さを伝える道徳教育であり、地域を理解し関心を持つための
教育であり、そして地域文化の活性化であると私は考えました。

今年8月20日に行われた入間市防災訓練で、私は仏子小学校の会場に参加し、
今年も多くの市民が防災訓練に参加しているのを見ました。しかし、そのほとん
どは年配の方々でした。将来にわたって持続的な活動にしていくためにも、私
たちのような学生や子供、そしてその保護者の年代の市民も、積極的に参加する
場であってほしいと感じております。

『「地域の助け合いの精神」から「自助共助の意識」に繋げていく、一種の「災
害文化」を作り上げる』

そのために、私は大学で更なる研究を重ね、入間市の防災に貢献したいと考えて
おります。

ドイツの労働環境、環境への取り組み

古谷 晶

現在、日本では過労死や女性雇用の問題など多く抱えているが、一方で、ドイツの労働環境が良いということを知ることがあった。そこで、私はドイツと日本の労働に対する意識の違いについて調べることにしました。

ドイツの労働時間は基本的に 8 時間で、朝早く（6～8時）から出勤し、4 時頃には仕事を終えることが多いそうです。また、週に 2 日必ず休みがあり、基本的には土日だが、休みが取れない場合は日曜日の他に月～金曜日までのどこかで休みが取れる仕組みになっています。また、ドイツでは 6 週間の休みを 1 年のうちで取れるようになっていて、6 月に 1 週間取り、7 月に 1 週間の休みを取るなどのように 1 週間の休みを取れるようになっています。



パン屋さんに訪れ、そこでの労働環境を聞いたところ、朝の 2 時～11 時まで毎日働いているそうです。しかし、実際に私たちが訪れた時にはもう作業が終わっていました。朝たくさん働き、夜は働かないスタイルはなかなか良いと思います。

市長にも質問をしたところ、労働時間は 10 時間で、イベントを除き、基本土、日休みとのことでした。日本と違って、人にも配慮した働き方であるなと思いました。

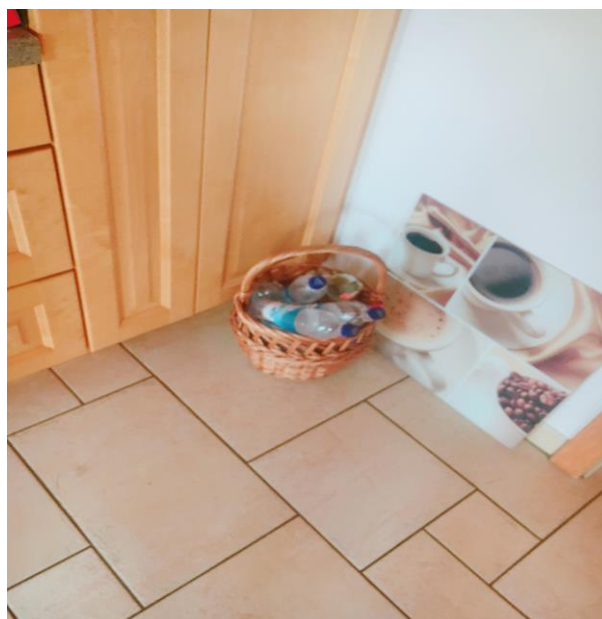


【学習の記録】

またドイツはすごく環境にも配慮していて、ヴォ市では紙、オーガニック類、衣服の3種類で分別されています。どの家庭でも瓶やペットボトルはとってあり、その容器はあとでお店へ持っていくとお金と交換してくれるそうです。学校や駅にもゴミ箱があり、きちんと分別されています。



ドイツは色々な国の中でも、特別環境に力を入れていて、私のホームステイ先もソーラーパネルを使用していました。ドイツの人は普段から電気を使う機会が少なく、エアコンがなく、夜もキャンドルなどを好みます。ソーラーパネルなども積極的に使用し、設置費用も掛かるがトータルで見たらソーラーパネルのほうがいいから、設置しているそうです。



【学習の記録】

難民問題と環境教育

水村 光希

難民問題について。ドイツ国内では 100 万人ほどの移民を受け入れている。ヴォルフラーツハウゼン市では 2012 年から難民を受け入れ始め、現在市の人口 1.8 万人ほどのうち 260 人が国外からやってきた人たちだそうだ。

移民・亡命者支援センターへ訪れた。そこにはわたしと同年代の女の子から、ドイツ国内で子育てをしながらドイツ語を学んでいる女性とその旦那さんもいた。アフガニスタンやシリアといった現在でもなお紛争が続いている地域から、身の安全を求めて 2 か月ほどかけて歩いてドイツにたどり着いたという。ドイツでは家族 5 人で一部屋に住まなければならない、難民や移民のための学校がないため、現地の人に通う学校に行くので母語でないドイツ語を猛勉強する必要があると言っていた。仕事や家を持ち、納税を 7 年間続けてようやく住民登録される。ドイツに移り住んだからと言って快適な生活が待っているわけではない。

ドイツ国内では住民と移民の間に軋轢が生じてテロなどの事件になってしまふことがあるがヴォ市での状況は異なっているという。現在 180 人がボランティアで移民の方を助けようとしているそうだ。このようにお互いを知ろうとすることで相手の文化や考え方を理解でき、その人自身を知っているという意識から、よくわからないから不安ということはないと言っていた。実際私も移民の方と話すことで相手の人柄や夢を知ることができたし、自分自身と大きくは違わないと感じ安心した部分もあった。勿論このことが住民全員に当てはまるとは思わないが人口規模の小さいヴォ市だからこそできる人々の近さなのだと思う。またドイツでは人口減少が進んでいくと言われているので移民の方が納税をすることや、働き手となることで住民にとっても必要な存在だと感じている人もいるという。



【学習の記録】

環境教育について。まず現地で感じたのは自然を守ろうという意識の高さよりもいつもそばにあるものという意識のほうが強いのではないかということだ。ドイツ人は、夏は基本的に散歩に行くのが好きだ。しかも一回の散歩に3時間くらいかけるし、舗装されている道を歩いていくというよりも森の中に入っていく。小さいころから両親に連れられて行くことが多く、小さいころは散歩は長いから嫌だったが今となってはよかったと思っていると言っていた方もいて、小さいころから自然に親しんできたからこそ大人になってもそれが生活の一部となっているのだと感じた。幼稚園に訪れた時にも木など緑の多さを感じた。

都市開発に関しては、高速道路の周りにも緑がたくさん残っていたし、高速道路建設の際にも生態系は壊さないように配慮するそうだ。例え強引に建設されたとしても動物が横断できるような通り道は確保される。日本では都市開発をする際に環境対策は二の次になりがちであるが、ドイツでは多くの緑が残っているのは法律に守られているからではなく、自然は残すものと人々の意識の下にあるからだという。

幼稚園などでは分別するよう口うるさく言われるそうだが、小学生・中学生くらいの年になると分別するのは当たり前で、しなければ逆になぜできないのと先生に問われたという。実際私たちが見学した高校では3通りに分別するゴミ箱があり、生徒たち一人一人がエコに取り組む責任を担っていると言っていた。

ヴォ市内の問題点として市長があげていたのは、現在細かい分別をしなければならぬので面倒くさくなって規定通りに分別をしない人がいるということだ。その対策として分別の種類をより少なくして細かい分別は業者に任せるようにすると言っていた。プラスチックは黄色い袋に入れるといった規定もある。



異文化体験訪問団派遣事業に参加される方々へ

○ 片山 夢源

異文化体験訪問団として参加し、ドイツを訪れたこの一週間は非常に濃く、楽しい時間でした。ノイシュヴァンシュタイン城や古い街並み、アルプスから続く自然は言わずもがな、ホームステイで味わえる日本以外の家庭は旅行では決して味わえない感動があります。近年、訪問団の参加者は圧倒的に女性が多いという現状があります。ですが、私はこの事業により多くの男子諸君に参加してほしいです。「英語が苦手。」「交流とかそんなに興味がない。」そんな理由で行かないのは勿体ない。もし、君が車好きならドイツの道行く車を見るだけでも満足することは請負です。

○ 吉川 尚孝

海外や、その先の家族と共に過ごすというのは不安かもしれませんが、ヴォ市の方々は本当に優しく、愉快で、家族の一員として扱ってくれます！自分から壁を作ることなく、積極的に話しかけるなど、いろいろなことにチャレンジしてみてください！

自分の学習テーマは具体的であればあるほど良いです。大雑把なものではなく、的を絞りこんでいくとそれに柔軟に応じてヴォ市側で訪問先を設定してくれます！「文化」といっても何を学びたいのかわかりません、「服」や「食べ物」と言ってもまだ広すぎるでしょう。自分で狭いかなと思うくらいでちょうどいいです。自分の行きたいところもダメ元でも相談してみましよう！

○ 叶 陽菜

学生のうちに自分の育ってきた環境とは大きく異なるものを体験することは、自身の柔軟性を養ったり、視野を広げたりする上でとても有意義なことだと思います。不安もあるかもしれませんが、ヴォルフラーツハウゼン市の皆さんはとても温かく入間市からの派遣団を受け入れてくださいますので、失敗を恐れず、ぜひ未知なる世界に飛び込んでみてください！きっと新しい発見がたくさんあるはずですよ。こんなに素敵な市と姉妹都市である入間市に住んでいるということはとてもラッキーだと思いますので、ぜひこのチャンスを生かしてください！

○ 川 合 優 香

ヴォルフラーツハウゼン市の方々はとても優しく英語が上手く話せなくても最後まで話を聞いてくれるし、たくさん話しかけてくれて日本の事や入間市のことにも興味を持ってきています。事前準備として日本のこと、入間市のことや自分の家族や学校のことなど説明できるともっと会話が盛り上がり仲良くなれると思います。写真を見せながら説明すればもっと伝わりやすくなっていいですよ！ちなみに私は、おりがみで鶴の折り方をホストファミリーに教えたらとても興味をもってくれました。旅行と違って現地の人と交流ができて、観光地でない所を沢山見ることが出来るのでドイツのリアルな生活を体験することが出来ます。

○ 伊 藤 望

まず一番言いたいことは、ヴォ市は本当に素敵な所です！食べ物は量が多くておいしいし、自然も豊かで、とっても優しい方ばかり！

私は冗談抜きで本当に英語での会話が苦手なので、出発前は楽しみよりも不安が大きかったです。でもヴォ市の方々の温かい歓迎で日に日にそんなこと忘れていきました 笑

とにかく不安でも何でも挑戦してみることが大事です。派遣団として参加すると普段できない貴重な体験がたくさんできます。自分の殻にこもらず、どんどん見聞を広げて行ってください！

○ 佐 藤 達 哉

入国審査は、英語で様々な質問を受けることがあります。わからないことがあれば、正直にわからないと言って大丈夫です。そのときは他の質問を考えてくれます。英語が苦手という人も心配はいりません。積極的にコミュニケーションをとって、現地の方々との交流を深めてみてください。現地は日差しが強く、暑い日が多いですが、朝夕や場所によっては寒い時もあるので、上着を常備したほうがいいかもしれません。バイエルンは本当に全てが美しいです。日本では決して見る事の出来ない街並み、牧場、自然を肌で感じてみてください。

○ 古 谷 晶

ヴォルフラーツハウゼン市は本当にいいところで、また街の方々や市の方々も良い人ばかりです。この事業ではホームステイをし、異文化に直に触れ、旅行では体験できない事を体験でき、また同年代の入間市に住む目標の高い人たちと一週間を共に過ごせるというところに魅力があると思います。英語が不安、海外に行ったことがないからという理由でこの機会を逃してしまうのはもったいないなと思うくらいです。ドイツ語やドイツに対して何も接点がなかったとしても、ドイツという国に行き、日本とどう違うかや日本より進んでいるところを見に行けるのはとても貴重な経験でした。この事業は旅行ではないので、それぞれが学習テーマを持って、ドイツに行きます。ドイツから学ぶことは本当にたくさんあるので、毎日が驚きや刺激でいっぱいでした。少しでも、ドイツに対して興味を持っている人や、ホームステイや海外に興味がある人はこの事業に参加して、自分の価値観を広げて行ってほしいなと思います。

○ 水 村 光 希

私は今回、現地の方とうまくやっていけるのか不安を抱えたまま出発しました。皆さんも不安はたくさんあると思います。しかし、一番大事だと思ったのは何でも挑戦してみるということです。そうすることで、この訪問が人生の貴重な体験となりました。英語でもドイツ語でも間違えてもたくさん話す努力をし、食事や生活習慣など日本と違う文化にせっかく触れられるチャンスを逃さないようにすることが大事だと思いました。特にバイエルンの方言を話すと喜んでくれます！ Habe die ehre!

ung, nach kriegsende Home- ungründliche Gemeinschaft, Isralen, „Wir haben mit al- „moderner“ undet. Komf- sie sein. Gemeinlich. Reisen. 1987-1988

Schloss Neuschwanstein darf nicht fehlen

Bürgermeister empfängt zum elften Mal Gäste aus der japanischen Partnerstadt Iruma

Wolfratshausen/Iruma – Nein, die sieben Stunden Zeitverschiebung war den Japanern nicht anzusehen, als Bürgermeister Klaus Heilinglechner die acht Jugendlichen und ihre beiden Betreuer offiziell im Rathaus begrüßte. Die Städte Iruma und Wolfratshausen sind seit 1987 Partnerstädte. „Und diese Freundschaft lebt von gegenseitigem Austausch“, betonte Delegationsleiter Satoshi Iwasaki. „Ich freue mich sagen zu können, dass wir be-

reits zum elften Mal ihre Gastfreundschaft genießen dürfen.“

Die jungen Japaner sind alle in Privathaushalten untergebracht. „Dort haben sie Gelegenheit, das Leben in deutschen Familien kennenzulernen“, erklärte Heilinglechner. Durch den Kontakt mit der Bevölkerung würden Freundschaften geschlossen und Verständnis für die Kultur des anderen geweckt. „Das ist ein Schatz fürs Leben“, so Iwasaki.

Das große Interesse an der Lebensweise ihrer Gastgeber zeigten auch die Fragen der Besucher. Wie funktioniert die Nachwuchsarbeit bei der Freiwilligen Feuerwehr? Wie die Abfallbeseitigung? Auch die Kinderbetreuung, das Schulsystem und der Wohnungsbau waren Themen, über die der Rathauschef mit den Gästen aus dem fernen Osten plauderte.

Natürlich soll bei dem einwöchigen Besuch in der Loisachstadt auch der Spaß nicht

zu kurz kommen. Auf dem Programm stehen Ausflüge zum Schloss Neuschwanstein, in die Bavaria Filmstadt nach München sowie zum Bozner Markt in Mittenwald. Außerdem erhalten die Gäste aus Japan Gelegenheit, selbst einmal Brezen zu backen und eine Kegelbahn zu besuchen. Rathauschef Heilinglechner meinte: „Wenn sie zuhause erzählen können, dass sie in Bayern ein paar schöne Tage verbracht haben, dann haben wir unser Ziel erreicht.“ sh



Erinnerungsfoto mit Bürgermeister: Klaus Heilinglechner begrüßt die Delegation aus Iruma.

FOTO: SH

FERIEN DAHEIM

ノイシュヴァンシュタイン城は外せない！

姉妹都市、入間からの11度目の訪問団を歓迎する市民たち

クラウス・ハイリングレヒナー市長が8人の青少年と2人の随行者に市役所で公式に挨拶をした時、7時間の時差は見受けられなかった。

入間市とヴォルフラーツハウゼン市は1987年以来、姉妹都市である。“そしてこの友好関係は互いの交流により育まれている”と訪問団団長の岩崎聡氏は強調した。

また、“私たちは11度目の訪問に際し、ご親切なおもてなしを享受させていただきます”と述べた。

青少年たちは皆、個人のお宅に宿泊する。“そこで、ドイツの家庭の生活を見聞きする機会を得る”とハイリングレヒナー氏は説明した。

住民間の触れ合いに依って親交が育まれてきた。そしてそれを通して異なる文化への理解が呼び起された。

“それは人生の宝である”と岩崎氏は言う。

ホストファミリーは訪問者のドイツの生活様式への大いなる関心に対して彼らの質問に答えたり、実際に見せたりした。

ボランティア消防団の後継者はどのように発掘、育成されるのか。

ゴミの処理はどのようになされるのか。

子供の福祉保護は？ 学校のシステムは？ 住宅建設は？ などが活動テーマであった。それらのテーマについて市長と遙か東方からのゲストたちは会談した。

勿論、一週間の滞在自体を目標を外すことなく楽しむべきである。

滞在プログラムにはノイシュヴァンシュタイン城、ミュンヘン、またミッテンヴァルトのボツナーマルクへの遠足が組まれている。

更に、日本からのゲストは自らプレッツェルを焼いたり、ケーゲル（ボーリング）場へ行く機会がある。

ハイリングレヒナー市長は“彼らが家に戻った時にバイエルンで過ごした素晴らしい日々について語る事ができれば、我々の目標は達成される”のだと考えている。

（写真の下のコメント：市長との思い出の写真 クラウス・ハイリングレヒナー氏が入間からの訪問団に挨拶する）

BESUCH AUS DER PARTNERSTADT IRUMA



Fesch: Im Trachtenmodengeschäft Fischer-Pflügl probierten die jungen Damen und Herren aus dem Land des Lächelns Lederhosen und Dirndl an. Mit Rat und Tat zur Seite standen den Gästen der Stadt Wolfratshausen Gudrun und Stefan Fischer (hi. li.).

FOTO: HERMSDORF-HESS

Krachlederne statt Kimono

Jugenddelegation schlüpft bei Fischer-Pflügl in Lederhose und Dirndl

Wolfratshausen – Zwischen den Gästen der Stadt Wolfratshausen aus dem Land des Lächelns sowie Gudrun und Stefan Fischer bricht schnell das Eis: Bei der Anprobe von Lederhosen und Dirndl am Freitag im Trachtenmodengeschäft Fischer-Pflügl herrscht ausgelassene Fröhlichkeit. Stefan Fischer scannt die drei jungen Herren aus der Partnerstadt Iruma/Japan mit fachkundigem Blick – und händigt ihnen jeweils eine Lederhose in der passenden Größe aus. Bevor's in die Umkleidekabine geht, gibt's noch ein paar Tipps: So gehen die Knöpfe auf und zu, so führt man die Träger über die Schulter. Die drei Japaner sind begeistert. Während einer in das für ihn ungewohnte Beinkleid und das blau-karierte Trachtenhemd schlüpft, machen seine zwei Freunde Fotos mit ihren Smartphones. „Very nice“, Daumen hoch.

Dolmetscherin Alexandra Frank mutiert derweil in der Damenabteilung zur Dauerfotografin. Einzelfotos, Gruppenbilder – das besondere Shopping-Erlebnis in der Flößerstadt muss für die Daheimgebliebenen ausführlich dokumentiert werden. Ist das blaue Dirndl das Schönste? Oder doch das rote? Gudrun Fischer und ihre Mitarbeiterin Doris Patterson stehen den Japanerinnen mit Rat und Tat zur Seite. Vorsicht: Die Dirndl-Schleife hat eine starke Aussagekraft: „Wer sie vorne rechts trägt, ist bereits vergeben – vorne links heißt, die Männerwelt hat noch Chancen“, erklärt Gudrun Fischer mit einem Lächeln.

„Ihnen gefällt das Design, in ihren Augen hat das Ganze etwas vom sogenannten Cosplay“, ein japanischer Verkleidungstrend, der in den 1990er-Jahren mit dem Manga- und Animeboom auch

nach Europa schwappte, sagt Übersetzerin Frank. Krachlederne statt Kimono: Der Termin im Wolfratshausener Trachtenmodenhaus stehe bei den Delegationen aus Iruma immer ganz oben auf der Wunschliste, ergänzt Rathausmitarbeiterin Helga Hacicbikiroglu.

Weiter ging's für die Gäste mit einem Besuch im Waldrammer Kindergarten, am Abend warfen sie einen Blick hinter die Kulissen der Weidacher Feuerwehr. Nach einem Abstecher zum Schloss Neuschwanstein, der Abschiedsparty im Wirtshaus Flößerei und der offiziellen Verabschiedung durch Rathauschef Klaus Heilinglechner steigen die Jugendlichen am kommenden Dienstag in München in den Flieger, der sie zurück nach Iruma bringt. Mit im Gepäck: gefühlte 1000 Terabyte Fotomaterial.

CARL-CHRISTIAN EICK

着物の代わりに革のズボン（バイエルンの民族衣装）

青少年訪問団はフィッシャー・プリュエグルの店でレーダーホーゼとディアンドルを試着

微笑みの国からヴォルフラーツハウゼン市へやって来たゲストと、グドゥルンとシュテファン・フィッシャーは直ぐに打ち解けた。

金曜日、民族衣装店フィッシャー・プリュエグルはレーダーホーゼとディアンドルの試着で陽気な楽しさに包まれた。

シュテファン・フィッシャーは姉妹都市、日本の入間からやって来た 3 人の青年を専門家の目でじっと見た。そして、それぞれに合ったサイズの衣装を手わたした。彼らが試着室へ向かう前に一言、二言助言した。こうやってボタンを留め外しして、ズボン釣りを肩の上にかけてと。

三人の日本人は感激した。

一人が着慣れないズボンとシャツを着ている間に二人はスマートフォンで写真を撮る。“Very nice”と言って親指を立てる。

通訳のアレクサンドラ・フランクはそうこうするうちに女性の部署でカメラマンに役替わりする。個別の写真、グループ写真＝ 筏の町での特別な買い物体験は日本で留守番している人たちの為に詳細に記録されなければならない。

その青いディアンドルが一番きれい？ それとも赤いの？

グドゥルン・フィッシャーと従業員のドリス・パターソンは日本人の女の子たちに助言を与えサポートする。

気を付けて：ディアンドルの結びのリボンは強い発言力を持っている。

“右前に垂らしている人は既婚者で左前だとまだチャンスがあることを男性に示している”とグドゥルン・フィッシャーは微笑みながら説明した。

“彼女たちはそのデザインが気に入っている。彼女たちの目には全体として見ればいわゆるコスプレのように映っている。コスプレとは日本ではやりの変装で、1990年代に漫画・アニメブームによってヨーロッパにも人気の波が押し寄せた”と通訳のアレクサンドラ・フランクは言う。

着物の代わりに革のズボン：ヴォルフラーツハウゼンでのプログラムにおいて入間からの訪問団にとって、民族衣装店での試着はいつも行きたい場所の上位に上がると市役所のヘルガ・ハチベキログルは付け加えた。

引き続きゲストたちはヴァルトラム幼稚園を訪問し、夕刻にはヴァイダッヒャー消防署の舞台裏を見学する。

ノイシュヴァンシュタイン城に立ち寄った後、レストラン・フレーサライでお別れパーティーがある。

そして、クラウス・ハイリングレヒナー市長と市役所で公式にお別れした後、青少年たちは火曜日にミュンヘンから飛行機に乗り込む、その飛行機は彼らを入間へと運ぶ。

沢山の写真で一杯の手荷物と一緒に。

写真下のコメント（カッコイイ：フィッシャー・プリューグルの民族衣装店で微笑みの国からやって来た青少年たちがレーダーホーゼとディアンドルを試着。ゲストたちにグデウルンとシュテファン・フィッシャーは助言を与えサポートする。

7. August 2017

LANDKREIS BAD TÖLZ – WOLFRATSHAUSEN

PWO

R9



FOTO: HARTMUT PÖSTGES

Ein Servus aus Japan

Fesch schauen sie aus, die Jugendlichen aus der japanischen Partnerstadt Iruma. Im Trachtengeschäft Fischer-Pflügl sind sie in Dirndl und Lederhose geschlüpft – und dann heißt es: Smartphones raus und fotografieren, was der Akku hält. Eine zehnköpfige Delegation weilt derzeit in Gastfamilien in Wolfratshausen, um Stadt, Land und Leute kennenzulernen – und um daheim von den neuen, bayerischen Freunden zu berichten. Der Besuch im Laden von Gudrun und Stefan Fischer ist längst zu einem der Lieblingstermine der Delegationen geworden. Die Woche an der Loisach ist vollgepackt mit einem abwechslungsreichen Programm: Breznbacken in der Königsdorfer Backstube, Ausflug nach Schloss Neuschwanstein, Treffen mit Aylhelfern und Flüchtlingen, Besuch im Kindergarten in Waldram, München mit Schloss Nymphenburg und Shopping in der Fußgängerzone. Am heutigen Montag heißt es schon langsam Servus sagen, am Abend treffen sich alle zur Abschiedsparty im Wirtshaus Flößerei. Dienstagfrüh verabschiedet Bürgermeister Klaus Heiling-lechner die Jugendlichen, die anschließend zurück nach Tokio fliegen. **sz**

日本から Servus (こんにちは)

カッコイイ！ 日本の姉妹都市人間からやって来た青少年たち。

フィッシャー・プリュグルの民族衣装店で彼らはディアンドルとレーダーホーゼを試着。

そしてそれからつまり：スマートフォンで写真を撮る、バッテリーが続く限り。

10人の訪問団員たちはヴォルフラーツハウゼン市とドイツの国を見聞するために、そして家に戻って友人たちに最新のバイエルンの話を伝えるために、今ヴォルフラーツハウゼンの家庭に滞在している。

グドゥルンとシュテファン・フィッシャーの店へ行くことは訪問団に人気のプログラムの一つとなっている。

ロイザッハ川沿岸（ヴォルフラーツハウゼン市）での一週間は趣向を凝らしたプログラムで埋め尽くされている。

ケーニッヒスドルファーパン工房でのプレッツェル作り、ノイシュバンシュタイン城への小旅行、難民と難民支援者たちとの会談、ヴァルトラム幼稚園訪問、

ミュンヘンでのニンフェンブルク宮殿見学と歩行者天国でのショッピング。

月曜日にはそろそろさよならの時を迎える。その夕刻にはレストラン・フレセライにて皆、お別れパーティーに集う。

火曜日には青少年たちはクラウス・ハイリングレヒナー市長に別れを告げ、ついに日本へ向け飛び立つ。



Unterstützung aus Fernost: Bäckermeister Konrad Stelmaszek (hinten 4. v. re.) und sein Team backten mit den japanischen Gästen Brezn. FOTO: TUTSCH

Entwicklungshilfe einmal anders

Junge Japaner zu Gast in der Königsdorfer Backstube

Wolfratshausen/Königsdorf
– In eine andere Welt tauchten die auf Besuch in Wolfratshausen weilenden Gäste aus Iruma ein. Die jungen Japaner wurden von ihren Gastgebern kurzerhand nach Königsdorf entführt. Dort durften sie zusehen, wie Konrad Stelmaszek, Inhaber der Königsdorfer Backstube, und dessen Kollegen Brote, Semeln und Kuchen backen –

und natürlich das bayerische Nationalgebäck, die Laugenbreze.

Es blieb aber nicht nur beim Zuschauen. Stelmaszek, Obermeister der Bäcker-Innung Miesbach-Bad Tölz-Wolfratshausen, hatte einen Teig für seine Gäste vorbereitet. Ihn formten die jungen Leute unter Anleitung erfahrener Bäcker zu den symbolisch gekreuzten Armen der

Breze. Mit Lauge bestrichen und gesalzen kamen die Produkte in den Ofen. Unterdessen durften sich die Japaner auch als Konditoren versuchen, formten aus farbigem Marzipan kleine Kürbisse. Selbstverständlich konnten die Besucher aus Asien ihre jeweils fünf frisch gebackenen Brezen zum Verkosten mitnehmen, als es zurück nach Wolfratshausen ging. wt

WIRTSCHAFT IM LANDKREIS

パン屋さんでお手伝い

日本の若者がケーニッヒスドルファーのパン工房へやって来た

異国との交流の機会として入間からのゲストがヴォルフラーツハウゼンに滞在している。日本の青少年たちはホストファミリーに手っ取り早くケーニッヒドルフへ連れていかれた。

そこで彼らはケーニッヒスドルファーパン工房のオーナーのコンラート・ステルマスチェックと従業員たちがどのようにパンやゼンメルクネーデルやケーキを焼いているのか、また勿論、バイエルンの民族菓子であるプレッツェルの作り方を見学させてもらう。

しかし、ただ見学するだけではない。ミースバッハ・バートテルツ・ヴォルフラーツハウゼン地区のパン職人同業組合の上級マイスターであるステルマスチェックはゲストの為にパン生地を用意していた。

青少年たちは熟練のパン職人の指導の元、そのパン生地でプレッツェルのシンボルとも言える交差した部分を形作った。

それにアルカリ液を塗り、塩をふりかけてオーブンの中へ入れた。

その間に日本人たちは菓子職人にも挑戦させてもらう。

色とりどりのマルチパンで小さなカボチャを作った。

当然のことだが、ヴォルフラーツハウゼンへ戻って行くときに、アジアからの訪問者たちは焼きあがったプレッツェルを各自5つずつ食べる為に持ち帰った。

写真下コメント（極東からの支援：パン職人マイスター・コンラート・ステルマスチェック（後列向かって右から4人目）と彼のチームが日本からのゲストと共にパンを焼いた）

Tiefe freundschaftliche Beziehung

Jugenddelegation aus Iruma genießt Aufenthalt in Wolfratshausen

Wolfratshausen – Seit 30 Jahren pflegt Wolfratshausen eine Freundschaft mit der 150.000-Einwohner-Stadt Iruma in Japan. Gegenseitige Besuche sind trotz der großen Entfernung fast zu einer Selbstverständlichkeit geworden. Die Gastfreundschaft Wolfratshausener Familien genoss nun Anfang August eine zehnköpfige Jugenddelegation.

Unter der Delegationsleitung von Herrn Satoshi Iwasaki, Mitarbeiter in der Abteilung für internationalen Kulturaustausch der Stadt Iruma sowie der Dolmetscherin Frau Chizu Wada lernten acht Jugendliche in ihren Gastfamilien das Leben in deutschen Familien und die Kultur Bayerns kennen. Für die Überbrückung weiterer sprachlichen Barrieren sorgten zudem der Lenggriser Ipppei Takama und die Studentin Alexandra Frank. Bürgermeister Klaus Heilinglechner, seine Stellvertreter Fritz Schnaller und Helmuth Holzheu sowie der Vorsitzende des Partnerschaftsvereins Iruma-Wolfratshausen, Ludwig Gollwitzer, empfingen die Gäste nach einem langen Flug zunächst auf einer Eröffnungsparty in der Gaststätte „Zum Löwenbräu“. Schon am Morgen des folgenden Tages ging es nach einem Rathausempfang zum Brezenbacken in die Königs-



Herzlicher Empfang: Bürgermeister Klaus Heilinglechner (2. v. r.) begrüßte die japanische Jugenddelegation vor der Gaststätte „Zum Löwenbräu“.

Foto: Herrmann

dorfer Backstube. Es folgte ein Treffen mit in Wolfratshausen lebenden Asylbewerbern sowie Asylhelfern. Für den fast obligatorischen Besuch auf Schloss Neuschwanstein stand der Jugenddelegation ein ganzer Tag zur Verfügung. Weitere Programmpunkte waren eine Besichtigung des Trachtenmodenhauses Fischer-Pflügl und des Waldramer Kindergartens sowie eine Fahrt in die Filmstadt Geiselgasteig bei Grünwald. Nach einem Besuch

auf Schloss Nymphenburg und einem Ausflug nach Mittenwald endete der achttägige Aufenthalt mit einer Abschiedsparty im Wirtshaus Flößerei und der offiziellen Verabschiedung durch Klaus Heilinglechner. „Obwohl die beiden Städte Unterschiede hinsichtlich Größe, Wirtschaft und Struktur aufweisen, hat sich eine sehr tiefe und freundschaftliche Beziehung entwickelt“, stellte Claudia Holzer von der Stadtverwaltung zufrieden

fest. Am 26. September erwartet der Partnerschaftsverein dann einen Besuch einer etwas älteren japanischen Delegation, um vier Tage später gemeinsam das 30-jährige Bestehen der internationalen Städtepartnerschaft zu feiern. Und am 24. Oktober steigt eine Wolfratshausener Reisegruppe ins Flugzeug, um eine Woche in der etwa 40 Kilometer nordwestlich von Tokio gelegene Stadt Iruma zu verbringen.

Peter Herrmann

深い友好関係

入間からやって来た青少年たちがヴォルフラーツハウゼンでの滞在を楽しむ

30年に渡り、ヴォルフラーツハウゼン市は15万人の人口を有する日本の入間市と友好関係を結んでいる。

互いの訪問は非常に遠く離れているにもかかわらず、当然の習わしとなった。ヴォルフラーツハウゼンのホストファミリーは8月上旬から10人の青少年をゲストとして親切にもてなすことを楽しんだ。

訪問団団長であり、入間市国際交流事業担当の岩崎聡氏、ならびに通訳の和田千寿さんの随行の元、8人の青少年たちはそれぞれのホストファミリーの所でドイツの家庭の生活とバイエルンの文化を見聞きした。

更に言葉の壁を配慮するために通訳の高間一平氏と大学生のアレクサンドラ・フランクさんが加わった。

クラウス・ハイリングレヒナー第一市長、フリッツ・シュナラー第二市長、ヘルムート・ホルツフォイ第三市長、ならびに入間友好協会会長のルードヴィッヒ・ゴルヴィツァー氏がレストランレーベンブラウで長時間の飛行を経てはるばるやって来たゲストたちを歓迎した。

明朝には、市長表敬訪問の後、ケーニッヒスドルファーのパン工房でプレッツェルを焼く。その後、ヴォルフラーツハウゼンに住んでいる亡命申請者並びにその支援者たちと会談。必ず行くべきとも言えるノイシュヴァンシュタイン城へ行き、まる一日楽しむために青少年たちは起床した。

更なる訪問場所はフィッシャー・プリュグルの民族衣装店、ヴァントラム幼稚園、並びにグリュンヴァルトの映画の町、ガイゼルガスタイクであった。

ニンフェンブルク宮殿見学とミッテンヴァルトへの遠足の後、8人の青少年たちの滞在はレストランフレーセライでのお別れパーティーと市役所でクラウス・ハイリングレヒナー市長と公式にお別れし幕を閉じた。

“両市は市の規模、経済、構成などに関して違いはあるけれど、非常に深く友好的な関係へと

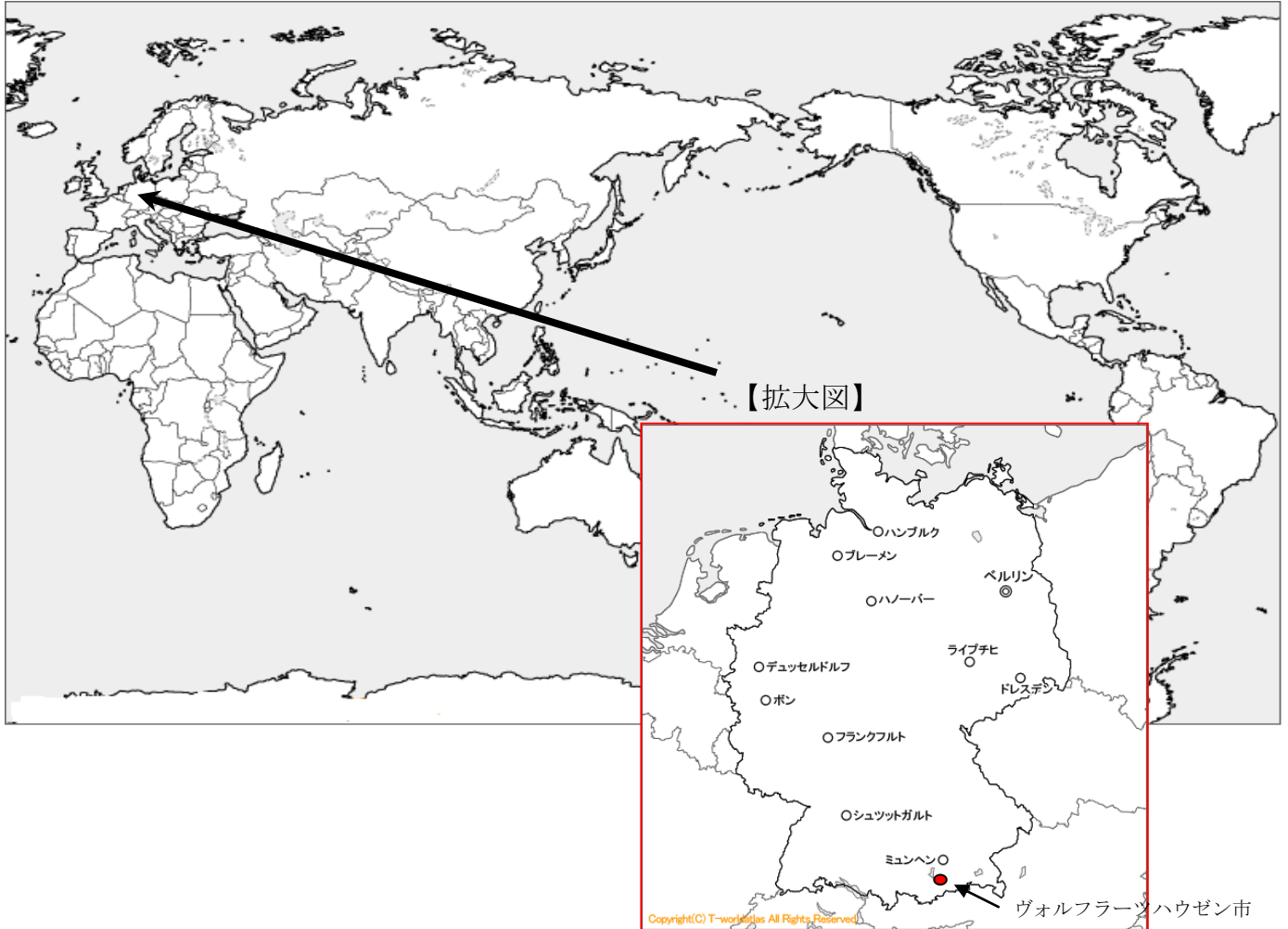
発展している“と市役所のクラウディア・ホルツァーさんは満足気に確言した。

友好協会は9月26日に日本からやって来る幾分年配の訪問団を待っている。

到着の4日後に共に姉妹都市提携30周年を祝うために。

10月にはヴォルフラーツハウゼンからの訪問団が東京からおおよそ40キロメートル北西に位置する入間市へと彼らを運ぶ飛行機に乗り込む。

写真下コメント（心を込めた歓迎：クラウス・ハイリングレヒナー市長（向かって右から二人目）がレストランレーヴェンブラウの前で日本からの訪問団に挨拶した）



編集・発行

〒358-8511 入間市豊岡1-16-1

入間市 自治文化課 国際交流担当

TEL 04-2964-1111 内線 2146・2147

FAX 04-2964-1720

URL www2.city.iruma.saitama.jp/i-society

E-mail isociety@m.ictv.ne.jp

Facebook www.facebook.com/isociety2012